

桂 盛仁 かつら もりひと

《盒子蟹》 ごうすかに



桂 盛仁 (1944- )  
《盒子蟹》

1980年  
彫金・四分一、金消  
高さ3.5, 幅9.5, 奥行7.0cm  
平成24年度寄贈

当

館のコレクションの基幹は、一九七七年の工芸館開館時等に文化庁から移管された伝統工芸の作品群によって形成されました。特に金工は、さまざまな金属素材にあわせて創意工夫された伝統の技術が高度に揮われています。なかでも、小柄や目貫といった江戸時代の刀装金具の流れをくむ彫金技法を継承し発展させた装身具でしょう。わずか数センチ四方の銀(四分一)や銅の地金に揮われた、各種の鑿による精緻な造形と金銀や多彩な銅の合金(色金)の象嵌や金消、鍍金による色彩豊かな表現、そして昆虫や小動物、花・植物等を主題として写実的でしやれた構成意匠と現代的な感覚とで表された小金具は伝統の粋といえます。

当館では、近代の名工と称された豊川光長・桂光春に連なり、桂盛行・鴨下春明の帯留や香合作品が開館時の移管によって収蔵されました。そして一九八一年度と一九九二年度に、桂光春に師事し戦前の帝展や新文展、戦後の日展を経て日本伝統工芸展で傑出した活躍を示した大木秀春の帯留やブローチ等の装身具が多数寄贈されたことによって、伝統の彫金による現代的な造形作品のすばらしさが明らかになりました。今回の桂盛仁の彫金作品はそれ以来のこととなります。

桂盛仁は、一九四四年東京都生まれで、父・盛行に早くから師事して修業し、日本

伝統工芸展等で活躍してきました。父同様、刀装金具の古典の伝統を踏まえ、打出しや鮮麗な色金と色絵等の技法を駆使した制作で、身近な小動物や植物を主題に新たな造形表現の可能性を押し広げています。二〇〇八年重要無形文化財「彫金」保持者の認定を受けました。

今回、硬い四分一(銅三に銀一の合金)を打出した愛らしいカンガルーの抓みをつけ、胴部にシルエットで原野を跳ねていくカンガルーを表した作品《打出し香爐躍》(一九九七年)、赤銅や緋銅、青金といった色金を鮮やかに用いた《帯留金具 磯の木》(一九九九年)や《帯留金具 めだか》(二〇〇三年)とともに、それらより少し以前の制作である本作《盒子蟹》(一九八〇年)の四足の寄贈を受けました。いずれも桂盛仁がよく取り上げる題材であり、伝統の技法の卓越さと、表現として生命の喜びに感じ入るような自然観とが満ちています。香を入れる容器の《蟹》は、金消の潮干にはい出してきた蟹をわずか六五ミリの幅で細やかに、じつに写実的な制作としたものです。四分一を用いた蟹の面相や、ハサミとツメの精細な打出しと黒みの赤銅や緋色の銅、金の象嵌など、若さなりにやや技巧的ですが、力量の確かさと主題の興趣さを感じがわけています。第二十七回日本伝統工芸展への出品作です。

(工芸課主任研究員 諸山正則)